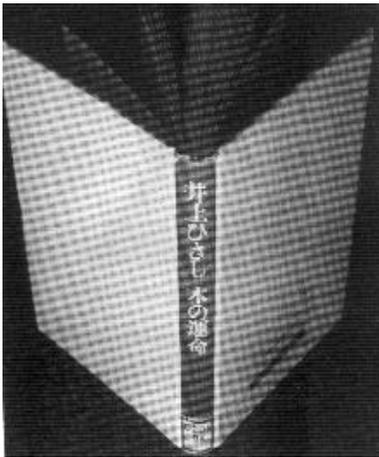


井上ひさし氏講演会「本との出会い」

『本の運命』

石川令子[Ⓔ]



平成10年5月21日、和泉図書館の開架閲覧室において、作家の井上ひさしさんを招いて公開講演会が行われた。演題は「私と図書館」。講演は、人間の脳の発達、言語の取得から始まり、インドの核実験に関連して原爆から戦争までと広範囲にわたるものであった。知識の宝庫である図書館の役割を訴え、人にとって図書館が第2の母胎になっ

てほしいと、ユーモア溢れる語り口で、大いに会場を沸かせた。

講演会に参加するにあたり、井上さんが本との出会いを語ったこのエッセイを読んだ。生い立ちから、故郷に半生をかけて集めた蔵書を寄贈して作った図書館のことまで、本にまつわるエピソードがたくさん詰まっている。父親が小説家志望、母親は文学少女という環境の中で、本と共に育った子ども時代。戦後の混乱期の田舎に、米はあっても本は無い状況で、欲しい本を求め、闇屋のまねごとをして、山形県から神田の本屋街に通った中学時代。映画漬け、本漬けだった高校時代に将来を決めてしまう程感動したディケンズの『デイヴィット・コッパフィールド』との出会いが、作家を志すきっかけとなる。本好きが高じて自分の家で調べものが出来る様

[Ⓔ]いしかわ・れいこ / 整理課

にと集めた蔵書が、なんと13万冊、その重みで家が壊れてしまう。半生かけて集めたこの13万冊の蔵書を故郷の山形県の川西町に気前よく寄贈し、町はこの蔵書を基にして「遅筆堂文庫」と名付けた図書館を田んぼの真ん中に作った。現在ではそこに芝居専用の劇場も加わって、この図書館が人々の生活の一部になっている。井上さんがこのように、故郷の活性化に役立つ活動を積極的に行っている事は本当に素晴らしいと思う。

たまたま手にした1冊の本が、人の考え方、生き方を変える事がある。また、人の手から手へと渡って行く本自身の運命に思いをはせる。そんな、井上さんの本に対する深い愛情が伝わってくる1冊である。